

合は、他科へのコンサルテーションとなる。心因性要素が大きい場合には精神科へのコンサルテーションとなるが、他の場合には原因疾患として最も頻度が高い整形外科疾患を除外するために、整形外科にコンサルテーションすることが最も妥当であろう。

文献

- 1) 平林 洵: 肩凝りの病態と治療. 臨床と研究 70: 199-204, 1993
- 2) 近藤正義・他: 肩凝りのペインクリニック. ペインクリニック 11: 311-318, 1990
- 3) 岩瀬 敏, 間野忠明: 肩周辺の神経疾患—内科的観点から見た鑑別診断. 関節外科 11: 431-439, 1992

平田結喜緒 監訳

書評

レジデントのための内分泌学

井村 裕夫 (京都大学総長)

内分泌学は一般内科医にとって、必ずしも親しみやすい領域ではないようである。それはホルモンに関する一定の基礎知識を必要とすること、病気の診断にあたって煩雑な負荷試験を必要とすることが大きい理由であろう。研修医の中にも内分泌学は苦手であるという人が少なくない。負荷試験ばかりでは興味を持てないのは、むしろ当然であり、これには指導する側の責任もあるであろう。内分泌学の特徴である理論を重視するあまり、プラクティカルな立場を失いがちになってしまうからである。

この度翻訳、出版された“レジデントのための内分泌学”は、実用性を重んじた、いかにもアメリカらしい書物である。デューク大学の W.M. パーチ準教授が著者で、東京医科歯科大学の平田結喜緒助教授らのグループが翻訳されたものである。内科を研修中のレジデントが日常の臨床で遭遇する主要な内分泌疾患が取り上げられている。頻度の多いものにページを割り、頻度の少ない疾患はやや簡単に書かれている。“インポテンス”や“多毛症”が1つの章で取り上げられているのも、いかにもアメリカらしい。“インポテンス”はアメリカの内分泌外来では、しばしば主訴となる疾患であるが、日本ではこれを主訴としてくることは少ない。また多毛症は、周知のように南欧系の民族に多い病気である。しかし、これらの病気も、わが国で次第に問題になりつつあり、若い医師に十分な知識が求められることになるであろう。

本書は、内分泌学の基礎知識を有するものが、実

際の症例に遭遇して、病気の概念、検査の進め方、治療法のあらましを知るのには、大変便利な本である。内分泌疾患の救急症が、巻初に、かなりのページを割いて書かれているのも、レジデントを対象とした書物としては適当であろう。欲を言えば“ナトリウム・カリウム代謝異常”や“肥満とやせ”も項目としてあったほうがよいと考えられる。これらは内分泌異常のみで起こるものではないけれども、やはり内分泌の臨床では重要なものであり、鑑別診断の概要を理解しておくことがレジデントには期待されるからである。

本書はあくまでもレジデントを対象とした実用書である。したがって、これのみで不十分な点は多々存在する。ただ、各章の終わりに参考文献が記載されているので、読者はより深い知識に容易にアプローチできるであろう。

翻訳という仕事は、科学書であっても決して容易ではない。原文に忠実であろうとすると生硬な日本語になってしまうし、適当な訳語が見つからない言い回しも存在するからである。訳者も大変苦労されたことであろうと思う。

本書はアメリカのレジデント教育を知る上には大変役立つ本である。若い第一線の医師にとって実用的な内分泌学を学ぶ入門書として、大いに有用であると考えられる。本書がわが国でも広く読まれることを期待する。

(B6判 224頁 3,914円(税込) 1995年
医学書院 MYW 刊)